

図書館通信

日大鶴ヶ丘高校図書館 第4号 令和2年6月発行



図書館部主任より

緊急事態宣言が解除されて約1ヶ月、人々の行動も通常に戻りつつあります。振り返ると東京都を除く39県に対し緊急事態宣言が解除されたのが5月14日。東京都に対しては約10日遅れて25日に解除され、その後6月3日に「東京アラート」の発動。都内の新感染者の増減に関心が寄せられる日々が続きました。そんな「東京アラート」も11日に解除され現在は「第3段階」状態で推移しているところです。

多くの人が言っているように、この新型コロナウイルスとの戦いは長期戦になりそうです。思わず「戦い」と言ってしまいましたが、「共存」なのかも知れません。言葉は現実を作ります。言葉こそが現実なのです。目の前に現実が存在しそれを適切な言葉で言い表すではありません。現実よりも**言葉が先**です。ですから言葉が無ければ現実はありません。ですから言葉の数だけ現実が存在します。この厄介な言葉と私達は生涯付き合い続けて行かなければなりません。できればよき友人として。

図書館紹介...その3 「鶴高生の読んでいる本」

図書館では学期ごとに最も貸出された本を発表していますが、特にこれといった傾向は見られません。そこで今回は過去に行われた「校内ビブリオバトル」で各クラスの代表になった生徒が推薦する本を、推薦コメントの一部とともに紹介します。



『死せる花嫁への愛』 ベン・ハリスン 早川書房

愛する人がしんでしまったら皆さんはどうしますか。愛する人の死体までをも愛した人のとてもロマンチックな物語。是非読んでみてください。

『府中3億円事件を計画実行したのは私です』 白田 ポプラ社

事件を起こした理由は何だったのか、そのようなけいがかだったのか、事件の真相が明らかになります。

『また、同じ夢を見ていた』 住野よる 双葉社

皆さんにとって「幸せ」とはなんですか。この本は本当の幸せについて気づかせてくれます。

『かがみの孤城』 辻村深月 ポプラ社

ある日突然部屋の鏡が光り始めた。輝く鏡をくぐり抜けた先にあったのは城のような不思議な建物。全てが明らかになる時、驚きとともに大きな感動に包まれます。

『三日間の幸福』 三秋縫 メディアワークス文庫

寿命を売ることができる世界。この世界で結ばれる恋はどのように発展するのか。訳ありな二人に訪れる恋の行方は？

『僕は君を殺せない』 長谷川タ 集英社オレンジ文庫

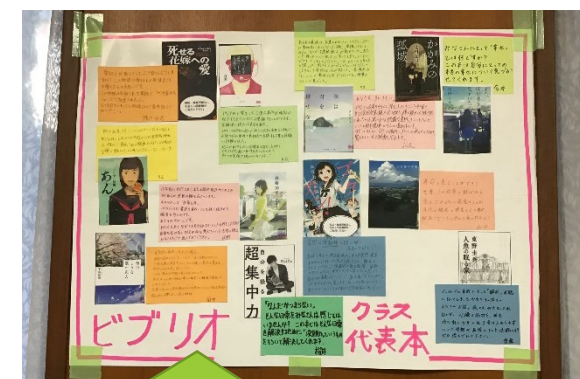
夏休み友人の代わりにミステリーツアーに参加した俺。そこで起こった連続殺人。衝撃のラストが見もの！

『自分を操る 超集中力』 Da i Go かんき出版

「なんだかつまらない」そんな日常を「没頭力」で解決してくれます。

『あん』 ドリアン助川 ポプラ文庫

差別や偏見の目にさらされながらも自分の信念を失うことなくしなやかに生きる元ハンセン病の老女と、彼女に感化される周囲の人達の心の変化をお楽しみ下さい。



紹介されている本の表紙（コピー）とともに、生徒直筆のコメントが図書館に展示しております

『桜のような僕の恋人』 宇山佳佑 集英社文庫

美容師の美咲に恋をした晴人。彼女に認められたい一心で一度は諦めカメラマンの夢を再び目指すことになるが、幸せな時間は長くは続かなかった。桜のように儚く美しい物語。

『余命10年』 小坂流加 文芸社文庫

あと10年しか生きられないとしたら何をしますか？余命10年の若い女性が、命をかけて綴った恋愛小説です。

『ブタカン！池谷美咲の演劇部日誌』 青柳碧人 新潮文庫nex

高二の美咲は友人に代わって演劇部の舞台監督通称「ブタカン」になる。汗と涙と少しの恋が詰まった青春ストーリー。劇中劇「走るなメロス」はめっちゃめっちゃ笑えます。

『人魚の眠る家』 東野圭吾 幻冬舎

心臓は脈打ち体も時々動く我が娘の死を、受け入れられずにいた母親が、最後に下した決断とは？是非読んでみて下さい。

いかがでしょうか。校内ビブリオバトルは毎年三学期に1年生が行っていたのですが、昨年度は新型コロナウイルスの関係で実施出来ませんでした。復活したら、報告します。



目 読書を通して考えよう

今、話題になっている本があります。アルベール・カミュの「ペスト」です。カミュの生涯を知ると、この本を書いた背景を想像することが出来るような気がします。しかし、今回は彼の紹介というよりも「ペスト」という著作を通して今回のコロナ禍を見てみようという事です。今まさに日本や世の中で起こっていることとリンクするので、多くのメディアで取り上げられています。

この本は私たちがこのコロナ禍で、どんな行動をし、何をすべきかというような事を問いかけていると感じます。主人公の医師リウーがペストという感染症がオラン(この舞台となる町)に広が

っていることを確信していました。しかし役所や他の医師は真剣に取り組むことをしなかった。その結果ペストが蔓延し多くの人々の命が失われてオランは約9か月もの間封鎖されてしまいます。

「ペストや戦争がやってきたとき、人々はいつもと同じくらい無防備な状態であった。」「こいつは長くは続かないだろう、あまりにもばかげたことだから。」この文章は最初の1章に出てきます。なんだか日本人の街頭インタビューを読んでいるような気がしませんか。

また、神父のパヌルーは「このペストはオランの持つ罪に対する神からの罰である」と町の人に説教しています。この部分は日本人にはなかなかピンとこないですね。しかし、神の罰であるということで、このペストに人々は科学的な思考を止めてしまいます。私たちが新型感染症の恐怖から思考を止めてしまうとどうなるでしょう。学校長が「正しく怖がる」と話していましたね。その意味はどんなことでしょうか？オランの町の人々の為に医師のリウーは仲間たちとペスト対策に奔走します。「ペストと戦う唯一の方法は誠実さだけだ」「自分の職務を果たすことだ」。まさにリウーたちは、誠実に自分たちの職務を果たそうと努力していきます。最初は市民の多くは自分一人だけの苦しみに自暴自棄になったり、町へ出かけて好きなように行動したりもするのですが、隔離が長くなった中で、ペストが町全体のすべての住民の問題だと考えるようになります。そうすると市民は各自が社会的責任のもとでペストに対して活動するようになっていくのです。

ここで、今私たちはこの本からどんなメッセージを受けますか？まだまだ感染症は収束していません。この世の中で「新しい生活」を、と叫ばれていますが、「ペスト」の中の「誠実さ」は私たちがそれぞれの立場でどう行動するべきかを考えさせてくれるのではないのでしょうか？ぜひこの本を読んで、自分の「誠実な行動」を模索してみたいかかでしょうか？

目 編集後記

どうしても話題が「新型コロナウイルス」関係になってしまいます。

このウイルスの世界的な感染は、国内外に様々な変化をもたらしました。国家間の関係においても、対立が表面化してきている傾向も見られるようです。

さて今回は一編の童話を紹介します。小川未明作『野ばら』。青空文庫でお楽しみ下さい。

